

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

DIGITAL  
2012



**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**DIGITAL**  
**2012**

Change Your World  
「歩き出した、第一歩。」



## ARTA 2012 RD.8 TWINRING MOTEGI

「歩き出した、第一歩。」

真っ白な水煙の中には十五対のヘッドライトだけが光り、  
隊列を先導するセーフティカー以外に車両の姿は見えない。

最終戦だというのに、ツインリンクもてぎには決勝を前に雨粒が路面を濡らし始めた。  
どんなに弱い雨でも、長く降り続けばやがてアスファルトは濡れそぼり、  
スタートの時を待つ観客たちの体温は奪われていく。

白く霞んだ観客席は、ドライバーたちを応援するキャップや旗の色ではなく、  
雨合羽と傘の色によって彩られている。

ツインリンクもてぎ

....



TWIN RING



「ラルフ、セーフティカー・スタートだ。2周以上セーフティカーが隊列を先導する」  
8号車HSV-010のエンジニア伊与木仁がコクピットのラルフ・ファーマンに  
無線で伝える。

水煙に消え入りそうな13番手を走りながらスタートを待つ8号車の姿を目で追い、  
ピットガレージで待機する小林崇志は唇を噛んだ。

「今週は僕にセットアップをやらせてください」最終戦を前に、小林は言った。  
不本意な結果の続くシーズンに、このままでは駄目だと誰もが感じていた。  
そんな中での、小林の決意。監督の鈴木亜久里は、小林のその心意気を買った。  
「今回は小林がセットアップを進めたいって積極性を見てくれたから、  
彼に任せることにしたんだ。

本当はシーズン中にも小林にそういうチャンスを与えてやりたかったんだけど、  
充分な時間をとることができなかつたんだよね。小林は順調に進めてくれたけど、  
もうちょっと時間が欲しかったね」



そして迎えた予選は、**Q1敗退の13位**。決して喜べるような結果ではない。  
だが、何かが変わり始めようとしている。  
そんな予感をチームの全員が感じつつあることは間違いなかった。

「セーフティカーがこの周回でピットインする。  
スタートだ！ スタートラインに気をつけて行け！」伊与木の声が飛ぶ。  
2周目までとは比べものにならないほどの水煙と轟音が、  
ホームストレートを駆け抜けていった。

雨脚は強くなったり弱くなったりと、一進一退。  
浅溝のウェットタイヤを履いているラルフにとっては、  
決して望ましい条件ではない。



「フロントタイヤが全然温まらないよ、これ！」

43号車ガライヤのステアリングを握る高木真一も、ウェット路面に手こずっていた。前戦と同じように、ウエットレースとなればその時の雨量によってタイヤの有利・不利が大きく別れることになる。

ちょうどこの雨量に合わなかつたのか、90度コーナーでは6号車が立ち上がりでスピンを喫してしまつた。

GT300クラスの首位を走る33号車のポルシェも、後続に追い立てられ苦しむ場面ばかりがテレビ画面に映し出される。

31号車もスピンアウトしグラベルに埋まつてしまつた。

「高木さん、ちょっとずつ雨が強くなつてきてます。気をつけてください」

「タイヤのフィーリングはそんなに悪くないよ。

コーナーでは負けてないんだけど、立ち上がりで全部やられちゃう……」





滑りやすい路面では、トラクションコントロールなど電子デバイスで装備したFIA GT車両の有利が大きくなる。ラップタイムは1周で4秒から6秒も違う。

それでも高木は諦めずにコクピットの中で試行錯誤を繰り返していた。突然の2秒以上のタイムアップに、エンジニアの佐藤真治が驚いて思わず聞いた。「今、急にタイムアップしたのはなぜですか？」「スタビ（ライザー）でいろいろ調整してるんだ。今、リアはハードにしたよ。それに、タイヤが良くなつたのもある。ちょっとでもラインを外すと滑るけどね」ドライバー交代までの最低周回数を消化し、ガライヤのタイヤにはしっかりと熱が入ってきた。

上位勢のピットストップが始まり、ピットトレーンは慌ただしさを増してきた。



「130Rが全開で行けなくなってきたるんだ。アンダーステアが出てきてる。リアの方が良いみたいだから、リアは交換しなくても良いと思うよ」  
やがて迎えるピットストップに向けて、高木と佐藤が無線で話し合う。

「フロントを換えるのであれば、リアを無交換にしてもアウトラップが厳しいのは同じなので、だったら両方とも換えた方が良いんじゃないですか？」  
「そうだね」  
「前後とも無交換っていうのもありかもしれないから、摩耗の状況を見てほしいんだ」  
「了解です、給油を先にします。その間にフロントタイヤを確認して、問題なければリアも大丈夫なはずですから、前後とも無交換で行きます」  
そして30周を走り終えたところで、高木はピットに向かい松浦考亮にステアリングを託した。



マシンの両脇では、メカニックがタイヤを置いて待っている。

給油ノズルがマシンに突き刺されている間に、ブリヂストンのタイヤエンジニアがフロントタイヤを覗き込みOKのサインを出した。

「タイヤ交換せずにそのまま行きます！」

佐藤の声が響き、松浦は豪快にホイールスピンをさせて飛び出していった。

14番手でコースに戻り、すぐに12番手までポジションを上げてこれからという矢先、松浦から弱々しい声が無線で届く。「クラッチが滑ってきてる……」佐藤は念のためクラッチペダルに左脚が触れていないかを確認したが、松浦がそんな凡ミスをしてかすわけはない。



「駄目だ、すごくパワーが落ちてきた。ずっと（クラッチが）滑りっ放しだよ……」  
行けるところまで行ってください。佐藤にはそう伝えるほかなかった。

ハードウェアのトラブルなのだとすれば、ピットウォールからできることは何もない。  
それから数分もしないうちに、松浦から再び無線が届いた。

「壊れた……ピットに入ります」

ガレージに戻ったガライヤは、松浦の言葉通りクラッチがトラブルを抱え、  
もうそれ以上走ることができる状態ではなかった。

「走り出した時からクラッチが滑る症状があったんだけど、  
段々それが悪化していって。それでもなんとか騙し騙し走ってたんだけど、  
もうこれ以上走ることはできなかった。残念です」松浦は悔しそうに言った。





高木がマシンバランスを向上させていただけに、上位に食い込める可能性はあった。

表彰台に手が届きそうで届かない不本意なシーズン。

だからこそ、この最終戦ではポイントを獲って終わりたかった。

悔しさはなおさらだった。

一方、8号車も苦しいレースを強いられていた。

「タイヤのグリップが落ちてきているんだ。雨も酷くなっている！」

ラルフのHSV-010には、タイヤに熱が入ってからは上位勢と同等のペースで走る力があった。

しかし、雨量が増せば浅溝タイヤではドライビングが容易にはいかなくなる。

19周目を過ぎて、伊与木がラルフに語りかける。

「ラルフ、ラップタイムが落ちてきている。

これ以上無理だったらピットインしてもいいぞ」



だが、雨脚が弱まつてくるにつれて、ラルフのタイヤは再びグリップを取り戻してきた。

「よし、ラップタイムが良くなってきたぞ」

ラルフは28周目まで走行を続け、ピットインすることにした。

後半のスティントを走る小林は、固い決意を胸にマシンを待ち受けていた。今までとは違う走りをしたい。今までの自分を変え、新しい一步を。

HSV-010がピットに滑り込み、コクピットのドアが開く。

それは、新しい未来への扉。

悔しい思いもたくさんしてきた今シーズンの最後に、  
その扉の向こうへと歩み出したいー。



ラルフと入れ替わるように、小林はロールケージに囲まれたコクピットに滑り込んだ。

「小林、後ろは**12号車**。2.5秒差だけど、前の**18号車**も近いよ！」

タイヤはすぐに温まるはずだから、プッシュしろ、プッシュ！」

伊与木の檄も、もう必要はなかった。

後ろに**12号車**を背負い、巧みに抑えながらも前を追う。

小林はハイペースで周回を重ね、**12番手**からポジションをひとつ上げる。

「後ろから来てる**6号車**も同一周回だから抑えろ。譲る必要はないぞ！ 残り**15周**！」

決して楽な状況ではない。

優勝を争っているわけでもない。

しかし今の小林にとって、目の前の**1つのポジション**を奪い取ることが戦い。

自らの限界をぶち破り、その戦いに勝つことに意味があった。



だがー。

テレビモニターにはターン3で横向きにスピノフし、  
グラベルに埋まる8号車の姿が映し出された。

一瞬のミスだった。マシンが限界を超えてグリップを失ってレコードラインから外れていった。

「引っ張り出されたら、レースに復帰できるから！ 水温に注意しながら走って！」

レスキューカーのレッカーに引き出され、小林のマシンはコースに復帰した。

しかしすでに周回遅れとなり、ライバルたちと戦う権利は残されていない。

52周を走ったところで、チェックカーフラッグ。

「すみませんでした.....」

とりもなおさず、小林はチームの全員に向かって謝った。





「12号車と争っていて上手く抑えていたんですけど、  
こらえきれずにスピンしてしまいました。  
自分のミスでレースを台無しにしてしまって申し訳ないと思ってます。  
自分の力がまだまだ足りないことがよく分かりました」

だが、それは違った。  
小林は間違いなく、このもてぎで一步前に進んだ。  
何も行動を起こさなければ、得るものはない。  
その行動の末に得た結果が成功であれ失敗であれ、そこからは学ぶべきものがある。  
成長がある。  
亜久里監督は、そのことを知っている。



「良いペースで走れていただけに残念だったよね。  
小林はよく頑張ったんだけど、ミスしてしまったね。  
でもこれが彼の経験に役立てばいいなと思ってるよ」  
気付けば、もてぎの雨は上がっていた。

一瞬で豪雨を晴天に変えることなどできない。  
少しずつ、進んでいけばいい。  
いつか、あれがその第一歩だったのだと振り返る時が来るはずだ。



## RESULT

▶ GT500 ARTA HSV-010 N08 : ラルフ・ファーマン / 小林 崇志

予選順位	決勝順位	Time/Diff	Best Lap
13位	13位	1LAP	1'53.873

▶ GT300 ARTA Garaiya N043 : 高木 真一 / 松浦 孝亮

予選順位	決勝順位	Time/Diff	Best Lap
10位	21位	14LAPS	2'00.542

▶ POINT DRIVER RANKING

GT500 : ラルフ・ファーマン / 小林 崇志 12ポイント 16位

GT300 : 高木 真一 / 松浦 孝亮 33ポイント 9位



**amsc**  
AUTOBACS Motorsports Conference

**AUTOBACS**

**BRIDGESTONE**

**Panasonic**

**Holts**

**Mobil 1**

**Coca-Cola**

**BP vervis**

**Pioneer**

**PHILIPS**

**BOSCH**

**Samantha Thavasa**

**PROSTAFF**  
ENJOY LIFE PRESENTED BY PROSTAFF

**CARMATE**

**CDI**

日東工業株式会社

**PIAA**

**OKAYAMA International Circuit  
岡山国際サーキット**

**SUZUKA CIRCUIT**

**TWIN RING MOTEGI**

**MPF**

**AUG アウグ株式会社**

**ALPINE**

**UNICON**

**WILLSON**

**エーモン**

**エステート**

**FEDERAL**

**m's**

**ELECOM Logitec**

**エンパイヤ自動車株式会社**

**BAL**

**CHASHI CARALL オカモト産業株式会社**

**EVOHO**

**KUMHO TIRES**

**Clarion**

**Crelom**

**JVCKENWOOD**

**新神戸電機株式会社**

**RAYBRIG**

**DUNLOP**

**星光産業株式会社**

**SEIWA**

**CellSTAR**

**SOFT99**

**クリンピュー**

**ダイヤックス**

**COMTEC**

**DENSO**

**TOYO TIRES**

**TB UNIFASHION**

**Trywin**

**NAPOLEX**

**KNOWLEDGE HOUSE CO.,LTD.**

**Turbo**

**JAPAN OIL SERVICE**

**MARSH CARBON  
HASEPRO**

**PAL STAR**

**ECLIPSE**

**FUJITSUBO**

**BroadLeaf**

**BONFORM**

**マルヨセセブン株式会社**

**MITSUBA**

**MITSUBISHI**

**MIRAREED**

**VAC**

**YOKOHAMA**

**リント**

**RECARO**

株式会社アウトソーシングセントラル

安全自動車株式会社

株式会社イヤサカ

株式会社ウェッズ

株式会社EDIX

Fデザインオフィス

興工業株式会社

コアーズインターナショナル株式会社

株式会社影ユニオン

株式会社サンコー

株式会社サンテック

株式会社ジース・ユアサバッテリー

株式会社湘南レオテック

株式会社幹織

日星工業株式会社

株式会社バンザイ

ブリッド

株式会社ホットスタッフコーポレーション

三菱重工業株式会社

株式会社ユビテル

株式会社ワツ

2012年4月10日現在会員企業

amsc (AUTOBACS Motorsports Conference) とは株式会社オートバックスセブンを中心に、自動車用品関連企業約100社が参加する任意団体であり、モータースポーツを核として「世界中のドライバーを車好きに変える」為に、自動車関連マーケット全体の活性化を目的とした団体です。将来的には、日本のモータースポーツ文化の発展と新たなカーライフ文化の創造に貢献していきたいと考えております。

# 1

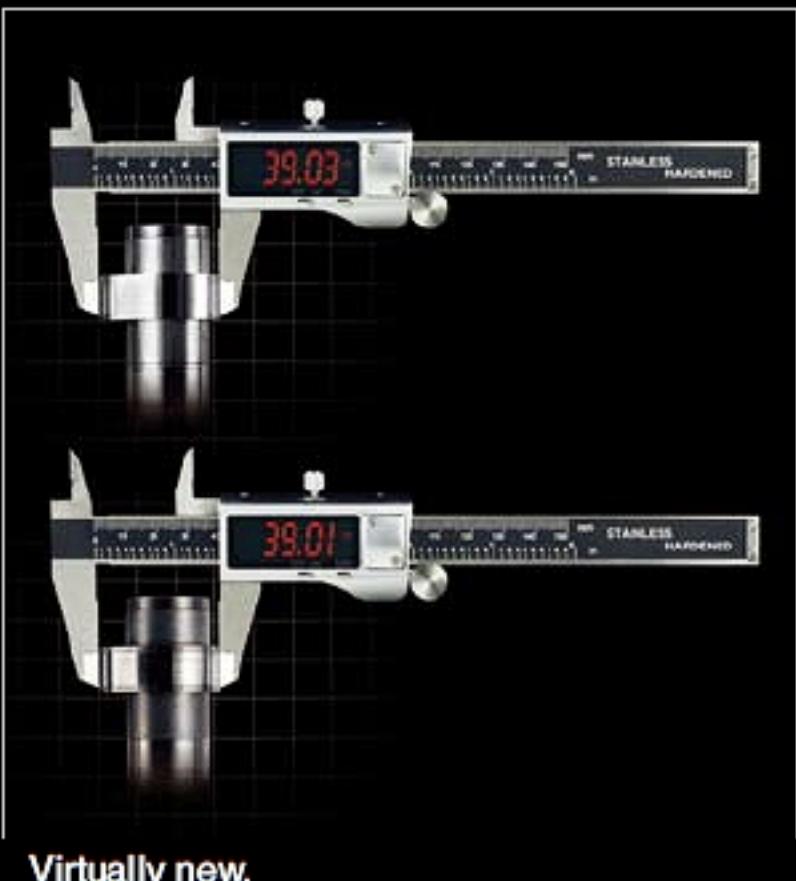
## Keeps your engine performing like new



Clean.



Protected.



Virtually new.

©2012 ExxonMobil Corporation. Mobil, Mobil 1 and the 1 icon are trademarks of ExxonMobil Corporation or one of its subsidiaries.



いつまでも新車のよう快適な  
ドライビングを実現します。

モービル1を使用したシミュレーションにおいて、  
100万キロ連続運転後もエンジンは新車のような状態を保つことが確認されました。

モービル1の全てを知りたい方は、 [mobil1.jp](http://mobil1.jp) へ今すぐアクセス！

API SN / ILSAC GF-5規格に適合\*

**Mobil 1**

\*粘度グレードによって、SN / ILSAC各規格に適合状況は異なります。

Thank You for Supporting



►CALM Flower



►ARTA GALS



►Samantha Thavasa Japan Limited

To be continued next race.....

**ZERO**  
BORDER  
Team ZERO BORDER

Copyright c2012 ZERO BORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki YONEYA

Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD